



八千代市郷土歴史研究会
会長 村田一男
事務局 勝田台3-24-10 牧野方

7月8日(日)例会 金乗院にて
上高野の民俗歴史調査

おしらせ

8月12日(日) 例会

集合：勝田台北口午前9時集合
上高野 フィールドワーク

- ? 福田さんの案内で上高野原からふれあいプラザまで歩きます。
- ? 午後はふれあいプラザで昼食・入浴後、涼しい部屋で上高野研究のミーティングを行います。
- ? お弁当・タオルを持参のこと

8月27日

? 「史談八千代」草稿〆切り
会長(村田一男)宛郵送のこと

9月9日(日) 拡大役員会

午後1時半～4時 市郷土博物館

- ・「史談八千代」原稿編集を行います。
- ・役員と執筆者全員ご出席ください。

9月17日

? 「史談八千代」決定稿〆切り
・増田(編集担当)宛郵送、またはEメールで必着のこと

9月23日(日) 例会

午前10時～午後4時 市郷土博物館

- ・文化祭展示製作
- ・「史談八千代」最終校正等

文化祭の準備作業の10月日程は、9月23日(日)にお知らせします。

文化祭展示発表!
10月27日(土) 午後1時～5時
28日(日) 午前9時～午後4時
勝田台文化プラザ 2階 展示室

13年度定期総会の報告

- ・4月8日(日) 午後2時より
- ・佐倉高校内地域交流施設にて
- ・総会参加者26名
- ・同日午前中、旧堀田邸などの史跡見学会は、22名が参加
- ・天気：晴れ

1. 事業計画
? 今年度の研究課題 「上高野」総合的文化調査
? 今後の事業予定 「八千代の道しるべ」の配布
? 次年度継続の事業 市内奉納句額の悉皆調査
- ? 13年度文化祭以降の予定
 - ・11月11日(日) 見学会「群馬県太田市・金山城址など」
 - ・12月23日(休) 見学会・反省会
 - ・14年1月6日(日) 日本橋七福神巡り
 - ・2月17日(日) 学習会(古文書)市郷土博物館
 - ・3月17日(日) 見学会(船橋市飛ノ台史跡公園博物館)

2. 役員変更
 - ・会計：黒住美代子 平野寿子(総務から)
 - ・会計監査：森山一徳 福田和雄
 - ・調査担当：村上昭彦 小菅俊雄

4月8日(日)
旧堀田邸見学会と総会に参加して
大西茂子

初めまして。植草さんと初めて参加した大西です。
ヘルパー2級講習会受講の際、ご一緒した会員の方より「石造物の文字を読んだり、道しるべを頼りに旧道を歩くハイキングをしませんか」とのお話でしたので、皆様方と一緒に歩かせていただこうかと、参加いたしました。

佐倉の駅からバスに乗り、きれいな4、5階建ての瀟洒な建物(ゆうゆうの里)の中をぬって、旧堀田邸(堀田正倫邸・明治23年竣工)前に着いた。玄関の構えもそこそこに靴を脱いで、三段ほどの階段を上がり、皆さんのあとについて行く。

内部との差がありすぎるほど立派過ぎる玄関は、お客さま本位なのか。

庭に見える広い部屋には、通風と採光のため質素ながら優美な欄間、部屋の天井の高さなどは現在の住居に似た庶民的な良さがあります。

湯殿(明治天皇行幸用とか)は、使った湯水の水はけの計算がうまくされていて、風通しも良さそう。

高台をうまく利用した庭、松の木一本一本の配置は、どこかのお城のお殿様の座る後ろの襖絵のようにステキです。



庭を出て、裏に回ると「これ、国産のタンポポよ」と恵志さんが教えて下さる。日本原産のタンポポは、繁殖力が悪く、貴重なのです。

蕎麦屋で昼食、そしていよいよ佐倉高校へ。

門を入ると、すぐに目につく建物、記念館があった。千葉県下、明治に建築された現存する唯一の高等学校校舎（堀田正倫伯爵の寄贈）前庭に立ちつくし、地域交流施設へ向かう。

総会のご挨拶は村田会長。交通事情が一変して難をまぬがれた道標や、地面の下に埋没した道標を掘り起こして記録し、安置してよみがえらせるというすごいことを行って、一冊の本を作成したという。それを右も左もわからない私にも下さるというのです。

「句額」の意味もわからず、足手まといになるだけでも、参加することに意義があるし、人がその土地に住みついたあかしを見つけようと思いました。

地域交流施設の展示室には、「温古堂」「成徳書院」扁額、孔子像、佐倉藩蘭学の道を開いた堀田家系図や「鹿山精舎」から佐倉中学、佐倉高校に至る関連資料、「舎密開宗」「ハルマ和解」などの辞書・医学書などが展示されています。

でも私が一番興味を持ったのは、佐倉市に生まれ、佐倉一高から戦後のプロ野球を代表する選手となった長嶋巨人軍監督の若い頃の写真でした。

- ・ 5月6日（日）
「八千代の道しるべ」の本の配布
- ・ 5月20日（日）
出版記念講演会と本の配布
- ・ 6月2日（土）
駒形神社句額解読後 11時～
本の配布と打合せ
- ・ 6月12日（火）
「血流地蔵道」道標の復元設置

以上の活動記録については、本誌「八千代の道しるべ」発刊記念 35 増刊号をご覧ください

新入会員紹介

畠山 隆
佐倉市ユーカリが丘一丁目

板谷 繁
八千代市勝田台三丁目

4月28日（土）

井野千手院から上高野を訪ねて

小菅俊雄

風もさわやかで初夏を思わせるような晴天に恵まれた、新緑のひときわ目に染みるゴールデンウィークの初日、蕨さん、園田さんのガイドで総勢 22 名（はるばる関西から村上さんも）が参加してフィールドワークを行った。

ユーカリが丘駅に9時15分集合、モノレールで女子大駅まで、駅前で今回特別に参加された地元の畠山氏（ペンネーム駕籠昇さんでHPを開かれ、旧成田街道を徒歩で道標を確認しながら歩かれた様子が、良くまとめられている。）を蕨さんより全員に紹介される。程なく村田会長も見えられ、参加者全員揃ったところでスタートする。

今回のワークは今年度研究会の活動目標の一つである上高野地区の民俗や有形、無形の文化財などを研究する課題のヒントを得るため、新川東岸の八千代市内真言宗系寺院の本寺として影響力を持つ、井野の千手院から上高野を歩いてみようというのが目的の一つ。

駅の近辺はマンションが立ち並び整然と都市化されている。駅前のできな道路を右へ、200m程行ったところで、左へ坂をのぼる。上りきったところの、三叉路の三角地帯に庚申塔や馬頭観音など 25 基ほどの石仏が草原の中に祀られている、志津郷土歴史同好会では「小竹三叉路野仏群」と命名している。その中に道標（サ11）（サ12）がある。

道を大きな道路まで戻り、千手院への道を辿る、モノレールの下をくぐると両側に水田が開け、風景が一変して、のどかな田園地帯となり、田植えの済んだところもある。やがて満開のツツジが燃えるような真紅の花や清楚な純白の花をつけ、咲き誇っているなか、細い坂を登って行く、やがて千手院の前につく。

坂の途中に辻切りが取りつけてあり、会長がその解説をして下さったようですが、性急に坂を登ってきた一部のせっかちな会員は（私も）、説明を聞き漏らして残念でした。（反省しきり）。

千手院は、初め白井にあった創立が天平年間（729～749）の金剛般若寺を明徳3年（1392）にこの地にうつして寺号を 千手院とした真言宗豊山派のお寺で、本尊は千手観音で

ある。この地方の仏教文化の中心地として栄えていた。

残念なことに明治6年に火災で伽藍や貴重な資料を焼失した。広い境内が僅かに往時を偲ばせますが、今は再建された本堂が静かに樹木の中に多くの石塔や石仏に囲まれています。末寺が 18 寺あって八千代市内、新川以東の真言宗のお寺の多くはこの末寺である。

入り口から本堂へ向かって参道を入るとまず右側に地蔵尊が祀られています、その台座の側面に八千代市内の村名が刻まれている。さらに左側には十九夜塔や二十三夜塔、愛染明王などの石仏がずらりと並んでいる。境内の大師堂の前で村上さんより大師講の札所や小回りなどの解説を聞く。また会長より境内奥の供養塔の前で、村上の宝喜作不動堂にも、この供養塔と同じ人の供養塔があるとのお話をきく、即身成仏の仏さまとか。

千手院を後にして、自動車の通る道へ出てツツジの花を見ながら、しばらく西へ歩く。間もなく子の神神社間廂道入り口にでる、道標（サ02）が林を背にして立っている、ここで記念写真をとる。



道を元に戻ると、すぐ三叉路のところガードレールの中に道標（サ13）がある、西カチ道と刻まれている。この三叉路を左にまっすぐ下りて行く、調整池を右にして行くと、向かい側にこんもりした山が見え、道の正面に道祖神の鳥居、右に浅間神社の鳥居が見える。

道祖神の前を左に10m程行き右へ坂道を上って行くと石段になる。石段を上ると八社大神の境内で、大神の祭神は別雷命ほか七柱で、もとは十二柱を祭っていたのが四柱を小竹に分祀したとある。

本殿の周囲には見事な彫刻がほどこされている。

また、神社左手には井野城跡といわれる、土塁に囲まれ、中に外より低い郭があって、中世の城跡と推定されているとのこと。

山を下り、モノレールの線路を渡り、二つ目の角を左折し、井野中学

校の塀沿いを歩き、ユーカリが丘北公園の北側にそって坂を登って行く。突き当たりを右折、道なりに梨園の中の道をゆくと、バス通りになる。右斜め前方に「大東建設」と「むつみ産業」の看板に挟まれて旧道があり、「むつみ産業」の看板の下に花崗岩でできた、道標（サ 14）がある。廃棄物の集積場の間、絨毯の敷き詰められている道を歩く、新品の絨毯なら王さまにでもなった気分になれるが、泥にまみれた廃棄物の絨毯ではその気になれず。

林の中、傾斜の急な坂を皆で足元に気をつけて降りて行く、坂道の途中で会長から後を向いての号令があり、振りかえったところを、写真にとられる。



坂を降りきると目の前がぱっと開けて、小竹川沿いの谷津田におりる。すでに八千代市の上高野である、水田の向こう側、右手にふれあいプラザ、左手に白幡神社の森がみえる。まっすぐに田んぼの真ん中を行き、川に架かる四号橋梁をわたり、右へ急な坂を登ると毘沙門堂の石垣が見える。中世城館の役目を持っていたのではないかとも思われる場所である。戦の神様の毘沙門天にお参りをする、お参りすると亡くしたお金が出てくるという有り難い神様とのこと。

毘沙門堂から西へ坂を登りきった十字路のところに庚申塔の集められた塚がある、この中に道標（E05）がある。

十字路を北へしばらく行くと、道路右側に道祖神が祀られている、その前を右へ小道を入る、家庭菜園の中を行くと、白幡神社に着く。社前の狛犬の石工が船橋の金子長七郎とあり、村上の七百余所神社の月待塔（D08）の石工石長と共通しているのではないかと、説明が会長と園田さんからあった。

道を元に戻って、さらに西へ坂を下る、道筋に長屋門の立派な家が目に付く、長い時の流れを感じさせ、調査が楽しみな土地柄のようである。車の往来の激しい道路にでる、左前に道標（E06）（E07）がある。途中

みどころが多くて、昼食の時間が過ぎてしまったので、昼食は予定のように、ふれあいプラザへ行かず金乗院へ行って食事をしようかという事になり、金乗院に向かったが、休憩する場所が無く、トイレも無いとのことなので、素通りしてふれあいプラザへ急ぐ。途中（E10）の道標や向かいの愛染明王などを見てプラザへ。

プラザへは初めて来たが大きな設備にびっくりする、温泉や温水プールなどがあり、お年よりのオアシスになっている様子。3階に上がり昼食休憩となる、時間は1時間の予定、ここまでで約一万歩、歩いたとのこと。

3時に午後のスタートをきる、プラザの出口に辻切りの大きな藁の蛇がとりつけてあった、上高野地区ではまだこの民俗行事が行われている。道を元に戻り千手院の末寺であった金乗院へ、今はお寺はなく、お寺の跡が上高野公会堂になっている。敷地内には石造物が多くなかでも座り地蔵像が立派である。建立者名に地元の山崎、蛭間などの名前がみえる。

金乗院から駒形神社へ林の中、落ち葉を踏みながら歩く、駒形神社で関和さんより明治初年代の俳諧についてのお話を聞く、この辺の字名は中世の城館を意味する殿台といわれ、由緒のありそうな地名である。

駒形神社から道を南へとる、途中民家の塀際に道標（E16）をみる、すぐバス通りにでて、左へ行く、セント・マーガレット病院が目の前、病院の入口左側にある山崎家の墓地へ集合、本日のゴール地点である。墓地内にある「三省」の碑に刻まれている「河水久澄」の歌の読み方を関和先生を中心にして皆で考える、碑は二つに割れたものを接いであって、最初のところがよく分からない。裏面の碑文は5月5日に拓本を取ってから読む事にする。

本日のフィールドワーク終了にあたって、会長より次のようなまとめのお話を頂く。

「今年の研究課題に取り組むにあたって、色々な切り口を考え、お互いに情報を交換したり、土地の方々にお話を伺ったりして十分な成果を得られるようにしましょう。」

今日歩きながら、途中、蔵さんより適切なヒントを頂き、各自夫々、胸の中に研究のテーマを描いた事と思います。

解散後、有志は郷土博物館まで歩き、「ふるさと八千代の道しるべ」を頂く、その出来映えに感嘆する。

5月5日

山崎三省碑拓本採り作業に参加して

福田和雄

5月5日こどもの日、三省碑の拓本採りに参加した。参加者は関和、蔵、村上、小菅、酒井、島山、福田の7名。午後1時に勝田台駅北口に集合し、車2台に分乗して現地に向かう。石碑は上高野の聖マーガレット病院の駐車場の東側にある山崎家の墓地内に建てられている。（以前蔵さんが発見された）



三省の名は飯綱神社や二宮神社の奉納句額に見える。本名を安教、通称久右衛門、号を三省と称し、川島家より山崎家へ婿入りしている。

石碑の正面右側に戒名、左側には安教銘の和歌一首刻まれ、裏面には泰堂小島義精による三省山崎翁碑陰記が漢文で書かれている。関和さんの指導のもと、先ず石碑に水をかけ、たわしや雑巾で拭いてたまったほこりやゴミを落とす。次に拓本用の和紙をあて、しめさせたタオルを巻いてしわにならないように注意しながら和紙を押しつけてゆく。

次に墨を含ませたタンポをたたいて行くのだ。関和さんが手本を示す。タンポをたたいて行くと白く字が浮き上がってくるようだ。周りから歓声があがる。次に私も試みる。

緊張して思わず力が入ってしまう。あまり強くたたくと紙が破けることもあるから力加減が難しい。濃すぎても薄すぎてもいけない。拓本ができるまで用意した新聞紙に間に挟む。蔵さんが写真を撮り、皆で交代しながら拓本を採る。後日の解説が楽しみである。

午後3時半頃終了した。良い体験をさせてもらった。機会があったら又参加したいと思う。

その後は村上さんの案内で、島田の山口梅舟碑、島田台の戒名塔、宝喜作の不動堂の石碑などを見学して勝田台駅北口へ戻り、午後5時頃解散した。

上高野駒形神社の奉納句額

関和時男

この句額は今から2年前の4月例会で駒形神社に参詣した際、地元の区長さんや有志の方々のご厚意より本堂に入らして頂き、長押に架かっていた句額を降ろして拝見したのが初めである。その時の模様は、会員の上山ひろし氏がレポートされて通信26号に掲載されている。

6月2日(土)9時から市郷土博物館の倉庫に格納されている駒形神社句額を会長から博物館にお願いして貸し出して頂いた。

今回は、参加した会員23名の方々に句額の実物を見ながら、用意した駒形神社句額の「読み一覧」と「俳句」とを見比べ学習するのが目的である。

初めて見る会員の方々も句額の素晴らしさに感動した様子。

句額は、明治30年11月3日に奉納されたもので、厚さ28mm幅490mm長さ1820mmの檜と思われ一枚板に見事な墨書で書かれた入集80句が並ぶ。

読んでいる内に読みと句額の間違いをいくつか訂正して資料の正確さを増す。学習の2時間は説明、質問、意見等、活発に行われて終わった。



この駒形神社句額は、市内で発見された最後のもので、それ以降すでに2年経過したが、その後はまだ見つかからない。

句額の内容を簡単に述べると、催主は上高野の山寄菊次郎、俳号朱唇亭學字 評者は東洲、岱以、背山等、以前の句額でお馴染みである。

判者は金羅、幾一、覚斎、素水。金羅、素水といえは当時東京の俳界では第一人者で覚斎は金羅の弟子。

句額の撰者クラスでは最高の顔揃えである。但し、夜雪庵金羅は明治27年没、句額奉納の3年前に他界している。

しかし、明治31年の吉橋八幡神社の句額に月之本素水の名があり素

水も明治30年に没していて疑問に思った覚えがある。

その時は1年差なので前の年に撰を依頼し供養のために乗せたのだろうと解釈したが、金羅の場合は3年もの隔りがあり、説明が付かず謎と言うより外はない。今後の研究課題としたい。

また、裏書きが残されていて催主、后見、補助2人の住所、実名が記されているのが貴重である。

前の調査で裏書きが残されていたのは、飯綱神社句額明治23年、高本八幡神社明治29年の2枚。

今回三省さんの墓所をわらびさんが発見し得たのも住所、実名山崎久右衛門と裏書きに記されていたからである。そのように裏書きは、これからの研究と地元文化のさらなる掘り下げを可能にする一級史料である。

駒形神社句額の裏書きもそれに匹敵するものであると思う。

これから上高野の全貌を各班に分けて調査を始めるに当たり、このような貴重な資料が多く発見され地元文化の花開くことを期待したい。

6月9(土)~10日(日) 宿泊見学会 いわき・常陸路の旅

わらび ゆみ

梅雨入り宣言もふつとぶ好天気、懸念された人数も14名が参加でき、定刻の7時前、バスは常陸路をめざし勝田台をスタートした。

太平洋を望む景勝の地、北茨城市の五浦に着く。ここは岡倉天心が明治31年、横山大観らの弟子と、日本美術院を移して、新しい美術活動を展開した地。六角堂・旧天心邸・天心記念五浦美術館などを見学し、大観ゆかりのホテルで昼食をいただく。

バスはさらに北へ、やがて陸奥との境、「勿来の関」伝承地へ。「吹く風をなこそその関と思へども道もせに散る山桜かな」と源義家の歌など、多くの歌や詩文に詠まれているが、関の所在は謎とのこと。散策路に並ぶ歌碑・詩碑を読むのも楽しい。

いわき市を望む605mの霊峰赤井岳に登る。この中腹に赤井岳薬師こと常福寺があった。最澄と宗論を争った僧徳一により大同元年(806)に移された名刹で、安産祈願の参拝が絶えない。

平安末期の浄土庭園、願成寺白水阿弥陀堂に着く。岩城氏に嫁した藤原清衡の娘、徳尼の建立と伝えられる。反橋と平橋の架かる池の向こう

に御堂が配置された様式は、33号で紹介した金沢称名寺庭園と同じであった。阿弥陀堂は午後4時を待たず閉門してしまったが、静かな苑池を一周し、心ゆくまで初夏の日長を楽しんだ。



常陸湯本のおいで湯に浸り、翌朝、常陸太田の佐竹寺を訪ねる。

佐竹氏は中世に常陸に君臨した名族、関ヶ原の戦いで徳川に味方せず秋田に転封されたが、今もその歴史をしのぶ史跡は多い。板東三十三観音のこの寺もそのひとつ。

水戸光圀隠棲の西山荘、午後からは水戸家の墓所瑞龍山を訪ねる。仏式ではなく、儒礼と神式に則った累代の水戸家藩主と正室の墓が深山に並び、光圀の師、朱舜水もここに眠る。

ここ御山に至る道に「從此／右棚倉／左御山／道」の道標があり、バスを停めてもらった。

バスの幅ぎりぎりの細い棚倉古道を通して、檜山酒造に寄りワインの聞酒を楽しむ。

帰路、水戸の茨城県立歴史館に立ち寄って、企画展「大古墳展」で黒塚・椿井大塚山古墳出土の夥しい鏡の展示、常設展では村上の正覚院と関連が深い大洋村福泉寺の清凉寺式釈迦如来像を見る。

八千代の歴史との関連や、道標などにもつい目が向いてしまったが、2日間すばらしい天気にも恵まれて、いわき・常陸路の名勝・史跡を心ゆくまで楽しみ、幅広い知識を得ることができたと思う。

ガイド役の牧野さん、会計役の園田さん、ありがとうございました。

編集後記

本号も充実した記事がいっぱいで、うれしい悲鳴！ Wordでの編集とmm単位の割付にも、やっとなれました。皆さん ありがとう。(ゆみ)